

を最後に皆さんにお願いして、お話を終わります。

シベリア抑留記

長野県 中山 麻人

出生から軍隊生活

私は、大正十一（一九二二）年一月一日、長野県上伊那郡美和村で生まれた。体重、昔流で一貫二百匁、生まれながらに頑丈だった。

当時、百姓の子は上級学校へ進学する者は極めて少なく、一クラス二、三人であった。

昭和十七（一九四二）年七月、当時の伊那町伊那図書館において徴兵検査を受けたが、当時の日本男子ならば全員が経験したことである。型通りの検査が終わり最後の検査官（陸軍中佐）のところで「甲種合格」と言われた時は正に天下を取った気分であった。

十月頃「兵科騎兵 昭和十八年一月十日金沢市騎兵第五十二連隊へ入営スベシ」の通知を戴いた時は、本

人はもちろん、家族一同大喜びで家門の誇りとまで言われていたが、本当の両親の気持ちはどうであったか知る由もない。

一月八日、雪の校庭で同級十人程だったか壮行会が行われ、翌々日、金沢市騎兵第五十二連隊の門をくぐった。配属は、機関銃中隊、重機関銃二個小隊、速射一個小隊（二門）であったが、体格が良いからと速射小隊に配属された。速射砲は当時、対戦車砲の秘密兵器と言われていた。

午前は乗馬訓練、午後は速射砲の訓練と若い体もくたくたであったが、騎兵は機敏迅速がモットーで、営内にも「駆足」と書いた立札がいっぱい立っていた。二カ月の訓練が終わり前期検閲が終わり、三月十一日夜、軍装をして営門を出発。十二日、下関で乗船、朝鮮を経て三月十六日、満州牡丹江省樺林第九師団騎兵九連隊に転属、いよいよ本格的な新兵教育が始まった。馬部隊はすべてが荒かった。朝、起床ラップで点呼の後は駆足で厩へ。蹄洗、餌付が終わり朝食の時には味噌汁は冷えきっていた。

金沢で初めて革長靴、軍刀を渡された時は天に昇った気持ちだったが、馬の手入れのために手はあかぎれでいっぱい、痛くて物をつかめない。乗馬訓練でひざの内側は化膿する。ピンタは帯革や、時には駄馬ムチ、馬栓棒と予想外の激しさであった。

明けて十九年三月、長野県、石川県、富山県より新兵さんが入って来た。私は教育係助手を命ぜられ、教官、助教と共に初年兵教育に汗を流す毎日であった。

十九年十一月二十五日、連隊長田川泉大佐以下五〇人、満州国興安北省ハイラル捜索第一一九連隊に転属、樺林での愛馬秀山と別れ別れになった。秀山号は尾花栗毛のすばらしい馬であった。今でもその姿は忘れることができない。

ハイラルでも年が明けて入ってきた新兵さんの教育を担当したが、中でも朝鮮出身の呉洲根鳳君のことは忘れられない。優秀であったが成績をトップにするこゝろができなかった。今でも後悔している。

四月から興安嶺の山中へ陣地構築に部隊の大半が移動して洞窟掘りをやった。我々はただの訓練と違って

いたが、上層部ではソ連の侵攻必至と見ての陣地構築であった。

ソ連侵攻から終戦

八月九日、突如ハイラルの留守隊の森下伍長等が興安嶺へ逃げて来た。話を聞けばソ連の飛行機の爆撃、またソ連戦車がハイラルから興安嶺に迫って来るとのこと、覚悟はしていたが何のための日ソ不可侵条約かと納得できなかった。

部隊は直ちに戦闘編成の体制を整えた。私は、七月一日付の新米伍長で、中隊の連絡係下士官を命ぜられて伊東正文中隊長と行動を共にすることになった。伊東中尉は神戸出身の召集兵で年齢も四十六、七歳、極めて温厚な方であった。

未完成の興安嶺の陣地ではソ連の戦車を阻止することもできず、部隊は後退することとなった。八月十三日頃、徒歩とトラックでの後退が始まったが、夜を徹しての行軍で、私は道路の真ん中で立ったまま眠ってしまったことを今でも覚えてい

興安嶺の東博克^{ボクト}図の郊外に一台しかない三七ミリ速

射砲の陣地を構築し敵戦車を迎えることにしたが、前日より前線に出た斥候の情報を知ると心細い限りであった。それはソ連戦車の大きさがとても我が方の三七ミリ砲なんかでは対抗できないこと、またハイラルで散々訓練した六キロの破甲爆雷を持って敵の戦車の下へ飛び込み爆破する戦法は全く通用しないとの話だった。我が軍が道路の端にタコ壺を掘りひそんでいるのを見るとソ連戦車はピタリと止まり、十数人の兵が自動小銃（マンドリンと呼んだ）で一斉に掃射して来て我が方は穴の中で戦死してしまうとの話だった。新兵の時から信じ切って訓練して来たこの新兵器が全く役に立たないとは。身体力が抜けて、雑のうの中のようにかんをかじったがどうしてものを通らなかつた。双発機が二機飛んで来て機銃掃射を始めた。二〇ミリ機関砲のぶい音に何の抵抗もできず、土塀の陰に隠れるのがやっとだった。

博克凶の街には日本の民間人の姿は見えず、既に撤退したものと思われた。十七日の夜、一人満鉄の社宅へ入り布団を重ねて初めてぐっすり眠った。明け方、

中隊長の「中山、中山」と言う声で飛び起きた。「中隊全員集合」、妙に中隊長の落ち着いた声だった。「全員集合終わりました」との報告の後、中隊長の言葉は「日本は負けた、戦争は終わった」と一言言った。現役兵で血気盛んな我々は一瞬体の中の力がすーっと抜けてしまった。

抑留から入ッ

その日の昼頃、興安嶺を越えて来たソ連戦車の大きいこと、長い太い砲身、驚くばかりだった。車上には十二、三人のソ連兵が乗り、真黒い顔で腕を振り上げて通り過ぎる。我が部隊長の田川泉大佐も白鉢巻をし、白旗を掲げたジープに乗せられソ連将校と共に通り過ぎて行った。

驚いたことに、街道の民家の軒先には昨日まであった日の丸と満州国国旗に代わって赤地に鎌の絵柄のソ連国旗が掲げられているではないか。何か余りにもの変わり様に夢を見ているような気がした。

その後、部隊命令により武装解除が各中隊に伝達された。伊東中隊長の命令により各人は腰の帯剣をはず

して一カ所に集めた。銃も集めた。最後に速射砲の眼鏡をはずして置いたが、あまりの口惜しさに銃床で目茶苦茶に叩いてしまった。必ず勝つと信じて来た一兵士の最後の抵抗だった。人間とは思議な存在だ。つい先刻まで帝国軍人の一員として、また陸軍の花とうたわれた騎兵隊の一兵士として相当の自信を持って来た者が、腰の帯剣をはずした瞬間から全く自信のない小心者の一人になってしまったことだ。既に街の中にはソ連兵や中国人の略奪が始まっていた。「ダワイ」「ダワイ」と言いながらソ連兵は日本兵の腕から時計を取り上げた。多いものは自分の両腕に十個以上の腕時計をはめて得意がっていたが、彼等の表情には昨日まで命をかけて戦って来た兵士の面影はなかった。スポーツかゲームでもやった後の心地良さが漂っている表情であった。これも日本軍の戦力を知り尽くして国境を攻め込んだソ連軍の余裕だったかも知れない。日本軍の上層部の仕打ちに腹の立つのを覚えた。何も知らなくてただ国のためと思っていた我々が馬鹿だった。もう人の言うことなんか信用しないぞと心に誓ったもの

だった。

移動命令によりジャラントンまで行軍が始まったが、後ろから満人が追いかけて来て、長い草刈鎌を首にかけ衣類等略奪された。二、三人隊列から離れた兵士はどうなったか、今でもあの悲惨な光景が目には浮かぶ。ジャラントンの駅はちょっとロシア風の駅舎であった。避難する日本人でこった返していた。その時、北の方から一列車入って来た。邦人が先を争ってその列車に乗り込んだが、その時、伊東中隊長は何と思ったか「全員列車に乗れ」と大きな声で号令をかけた。我々は先を争って列車に乗ったが、乗ってみて驚いた、中は開拓団の人達でいっぱいだった。一人の立派なヒゲの老人は着衣が真赤に染まっていた、明らかに人間の血であった。「どうした」と聞くと、声を震わせながら「ソ連兵や満人に追われて開拓団を引き揚げて来たが、途中やむなく子供と女はこの手で殺して来た」との返事が返って来た。戦いに負けた惨めさを感じた。この駅から我が伊東中隊は本隊と離れ離れになり単独の行動となってしまったが、運よ

く一個中隊全員が行動を共にすることができた、これは心強いことだった。

立ちづめの列車で着いた所はチチハルだった。チチハルの収容所に入ると完全にソ連兵の警戒の下、抑留生活が始まった。ここでの二カ月間は何の作業もなくぶらぶらしていたが、食事が少なく閉口した。身長一七〇センチ、体重八〇キロの若者には空腹が一番の敵であった。しかし周囲を警戒するカンボーイの「ヤホンスキースコーラ東京ダモイ」の言葉を信じて、野球チーム等編成して時を過ごしていた。

十月七日、荷物をまとめて出発の命令が出た。カンボーイが口を揃えて「東京ダモイ」「東京ダモイ」と大声で叫んでいる。中隊は皆沸き立った。衣装、食糧等大きな荷物を作り、持てるだけの物を毛布に包んで背負った。大の男がよろめくほどの大きな荷物だった。何の疑問も持たず、もう心は故郷の父母や懐かしい山河を思い浮かべていた。チチハルの駅で待っていたのは上下二段の貨物列車だった。日本へ帰る嬉しさばかりが先に立ち、一貨車百人近く詰め込まれ、荷物

と兵隊で身動きもできないのに、誰一人文句を言う者もなかった。

扉が閉められ、やがて貨車は動き出した。車内はまるで旅行気分であった。どの位走ったか、ある兵隊が貨車のすき間から外を見ていて「あれっ」と大きな声を上げた。「この汽車は北に走ってるぜ、興安嶺へ向かってるぜ」と大きな声で叫んだ。一瞬貨車の中には何とも言えない空気が流れた。一番心配していたソ連の捕虜という事態が現実となってしまった。体がふるえた。次の瞬間、誰かの声が車内を一遍に明るくしてしまった。「心配することはないよ、この汽車は興安嶺からハイラル、満洲里を経てソ連領へ入り、チタの手前で右に曲がり、シベリア鉄道でナホトカ、そして船で日本へ帰るんだよ」。車内の空気は一変した。そうだそうだ、それが一番近道だもの、皆我が心に言い聞かせて落ち着いた。

一番困ったのはトイレ、いつ、どこで停車するか全く分からない。思案のあげくに貨車の一隅に三〇センチ位の穴をあけた。誰がどうしてあけたのか？ 大勢

の人がいれば何でもできるもんだ。国境を越えて原野の真っ只中に汽車は止まった。チチハルを出発して三日目位か？ 何か日付けがはっきりしなくなった。貨車の扉が開かれ、全員外へ出て体操をした。長い貨物列車に添って長い兵隊の列、千人以上いただろうか、相変わらずマンドリンを持ったカンボーイがロク々に「ヤボンスキー東京ダモイ」と叫ぶ。ソ連の輸送指揮官がやって来て同じように「東京ダモイ」と二回ほど繰り返して言う。

三年間の抑留中この言葉ほど我々に勇気を与えてくれた言葉はなかったが、輸送の途中、平気な顔をして「ウソ」をつくソ連の国民性に腹も立つが、一方で、あの徹底した統制ぶりには呆れるばかりである。おそらく我々日本人がカンボーイなら一人や二人はきつと「東京ダモイはウソで、ソ連へ抑留するんだよ」と洩らしていたに違いないと思う。

貨車は幾日走ったか、ろくな食事も与えられず、携帯した乾パンが唯一の命の綱であった。ある朝、貨車はガタンと止まった。扉のすき間から見れば停車場で

あり、街の中である。私は貨車の上部にある小窓を開けて僅かに顔を出して、やって来た検査係の女性に街の方を指さして「マダム、チタ？」と声をかけた。マダムは首を縦に振り「チタ」とうなずいた。一瞬体の力が抜けてしまった。「おい駄目だ、ここはチタだ」、彼等に完全にだまされたのだ。東京ダモイは一瞬にして吹っ飛んでしまった。貨車の中は悲痛な話し声でいっぱいになってしまった。

また一昼夜の貨車の旅は、話し声一つない、車中はまるで無人の貨車が走っているようである。到着した所はウランウデの駅であった。全員下車して見ると外は一面の雪、十月半ばのシベリアは故郷信州の厳寒期より寒かった。私はその頃、アメーバ赤痢に冒されていて、下痢がひどく夜昼何回となく大便をしに行っていた。体も大分弱っていたが、皆と離れることもできず雪の中の行軍に加わった。既に持物のうち毛布や下着等必要なものは駅の服装検査で全部没収され、何のためかチチハルであるように荷物を持って来たか、ソ連は日本軍人に運び屋の役をさせたのだと思うと口惜し

さでいっぱいだった。運び屋と言えば、チチハルに収容されている時に見た、夜となく昼となく食糧や資材をいっぱい積んだ貨車が北へ進むのを見て来た。恐らく関東軍の資材、食糧等を全部ソ連領内に運んだに違いなかった。

ラーゲルへの行進は本当に辛かった。マンドリンを持ったカンボーイに囲まれ、彼等の「ダワイ」「ダワイ」の声に追い立てられての行進は全く犬に追われる羊の集団より悪く、これがかつての関東軍の精銳の姿かとしみじみ情けなくなつた。途中の夜営には薪で大きな火を焚いて、その回りに外套を着たまま横に丸くなって眠つた。朝、目を覚ませば防寒外套が地面に凍りついて離れない。

この行軍中一番困つたのはトイレだった。一時間も経つと便意をもよおすが出るものは何もない。しかしズボンを下ろしてしゃがむ。横を無言の兵が通り過ぎて行く。遅れてはならないの一念で二泊三日の行進も終わり、ようやく丸太造りの収容所へ着いた途端に寝台に倒れてしまった。幸い伊東中隊は単独で一棟に入

り、私も二階の暖かい場所を指定してもらい、次の日からいわゆる練兵休扱いとなつた。この時、大妻お世話になつたのが石川県出身の佐々木信夫君であつた。彼はハイラルに三月入営した初年兵であつた。教育係をしていた私は何一つ特別なことをしたわけではなかつたが、自ら当番兵を買つて出て、食事の世話や何やら一切面倒を見てくれた。その彼も数年前、大阪府寝屋川市で亡くなつてしまつた。長身で優しい好青年で、今でも恩を忘れずに冥福を祈っている。

入院生活

同僚は皆ログハウスの修理やら薪採り等の作業に出ているが、私は二段ベッドの上に佐々木君の世話を受けながら寝ていた。ある日、ソ連の将校と通訳が入つて来た。中山は入院だと言う。大急ぎで荷物をまとめて、追い立てられるように迎への幌付きのトラックに乗り込もうとしたが、力が抜けてどうしても荷台に登れなかつた。どこをどう走つたも分からず夕方病院へ到着し、伝染病棟のベッドに横たわることができた。病院といつても相変わらぬログハウス、一室五十

人位の兵士が横たわっていた。私は運良くペーチカのすぐそばのベッドで、これが私の命を永らえたと思う。ベッドの下には洗面器があり、これがトイレだ。

一晚に二十回トイレに行ったことは今でも覚えていたが、これが赤痢の特徴らしい。病院といっても回診があるわけがなし、薬を飲むわけがなし、朝一回看護婦が注射器を何本も持って来て、最初から口を開けと
言う。上を向いて口を開いていると「チュューッ」と口の中へ液を入れて行った、甘い液でうまかった。幸いに暖かい部屋での休養でトイレの回数も少なくなり、最悪の事態は免れた。そこで考えて腹部をしっかりと温めることにした。水筒にいっぱい水を入れペーチカの蓋を開いておくと五分もたたないうちに熱くなった。それを腹の上に乗せて温めて、冷めてくるとまた温める。この繰り返しを一日何十回もやった。腹を見れば低温やけどで赤アザがいっぱいいついていた。これは帰国後、五、六年は消えなかったが、中山式治療法が私の命を救ってくれたと思っ
ている。思い出の水筒は真っ黒でデコボコしているが、私の宝で大切に保管し

ている。体調は段々良くなったがまだ歩けない。太股を親指と人指し指で巻いてみると昔の腕と同じ太さになっていた。

人の死ぬのは大概夜明け少し前だった。病室のどこかで「ギャーッ」と言う叫び声が聞こえてくる。一声または二声、それは日本兵の最期の声であった。妻子もあつたろう、両親もあつたろう、どのような思いであの世へ行ったのだろう。こんなことを深刻に考えていると眠る気にもなれなかった。亡くなった人の周りがざわめいて来た。首を回して見れば何ということだろう、隣にいる病人が一人二人よろめきながら近づいて、争いながら雑のう、飯盒その他の身の回り品を奪い合っているのである。何たる姿であろう。朝になって見ればその兵士の身辺は何一つ残っていない。ソ連の衛生兵だろうか、担架を持って近づいて硬直した体を無造作に乗せて行く。彼等の主義は死んでしまえば人間と言えども一個の物体に過ぎないのだ。丁重に葬儀を行う日本人の感覚ではとても理解できない。二、三日たつとまた同じような光景が始まる。伝染病棟の

患者は皆、骨と皮となって死んでいった。仏画で見る正に地獄の図のような光景の中で昭和二十一年を迎えた。

シベリアの空は一年中日本の秋空のように青かった。ベッドの上でその空を眺めると無性に故郷のことが懐かしくなってくる。

両親のこと、兄弟のこと、また故郷の山や川の姿がはつきりと頭に浮かんで来た。俺はもうここで彼等の後を追って死んでいかなければならないのか。涙が流れてシーツを濡らすのははつきりと分かった。しかし次の瞬間「何くソッ、こんなシベリアの奥地で死ぬものか」、同胞が同胞に身ぐるみはがれる姿をさんざん見て来たためか、こんな気持ちにもなって来た。毎月ソ連医師の検査があり、四月末退院と決まった。まだ廊下をヨロヨロ歩いている者に退院とは何だと思ふ反面、嬉しかった。それは原隊復帰、皆に会えることだった。廊下での歩行練習にも一段と熱が入って来た。

シベリアの労働

四月になっても極寒のシベリアは内地の寒中以上の寒さだ。顔見知りとなった病室の皆と軽い挨拶を交わして輸送の幌付きトラックに乗せられた。病み上がりの身には辛かったが、ようやく到着した収容所にはあつと驚いた。私の頭の中にあつた原隊復帰は一遍に吹っ飛んでしまった。場所も違う、もちろんラーゲルも違う、俺はたった一人になってしまった。伊東中隊長を初め、幹部や同僚に会える、このことだけが生きる張り合いだったのに、これはどうしたことだろう、体の力が全部抜けてしまった。

千人程度のこの収容所の作業は赤松の伐採作業だった。信州の山で見慣れた赤松が広い平地に密生している姿は壮観であった。石を投げて十メートルも飛ばない赤松の密林を、一本一本倒してはこれを二メートルに切り、一カ所に一メートルの高さに積み上げるのが一人のノルマだった。ソ連の鋸、鎌、どれも使い慣れないので苦労したが、段々と慣れて来て日本の鋸より楽だったが、集積が一番大変だった。生の赤松は重

く、それを担いで集めるのだが、直径二〇センチになると二人で担げなかった。

枯松を集めて焚き火の回りで食べる昼食の時間が楽しく、また悲しい時間だった。一かけらの黒パンと飯盒の中のスープへ雪を溶かして倍量にして飲み込むが、胃袋のどこに入ったか感じがない。焚き火の回りにはじっと頭を下けている人もいる。朝、空腹の余り昼飯を食べてしまったのだ。食べ終わった後は毎日繰り返す全国うまいもの談義が始まる。ぼた餅、おはぎ、ぜんざい、お汁粉、ようかん等、主流は甘い物が多かった。これも肉体的に体が欲していたのだろう。

作業中には悲劇も生まれた。皮シューバとフェルトの靴は本当に体に重かったが、これではなくては寒さを乗り切れないのだ。風の強い日、腰を下ろしての伐採は危ないので特にやかましかったが、幾組も倒れる松の木の下敷きになっての死亡やけが人が出た。閉口したのは作業のための衛門の出入りだ。五列縦隊に並ばせ、前列から「アジン」「ドバー」「テリー」「チェテリー」と教えて行くが、中頃まで行くと間違えてしま

う。また一列目から数え始める。四、五回このようにしてやらないと人員が確かめられない。帰りも同じようだ。足を止めていると体も寒い。何と馬鹿な連中だとぶつぶつ言ってみても相手は剣のついた鉄砲を持った警戒兵、よくよく捕虜の悲しさが身にしみたものだった。

伐採の後は積込み作業だ。アメリカ製のマッシーナーと呼ぶ十輪車が平地林にどんどんと進入して来る。それに七人一個班を編成して積み込む。二十四時間ひっきりなしに来る車に三個班八時間勤務である。

シベリアの夜は冷える。材木の長さは六メートルの長尺物、これを左右に二人、車上に二人で班長の号令で突き上げて行き、上の二人が逐次積み込んで行く。技術も要るし力も要るし、危険な作業であった。休憩の折、隣の作業班の班長さんがやって来た。「出身は何県だね」何気なく聞いた。「長野県」との返事が返って来た。「えっ、俺も長野県だ」、隣村河南村出身の西村又夫さんとの出会いだ。短い会話しかできない機会だったが、数千キロ離れたシベリアの地で、

しかも抑留の身で隣村の人と会えるとは正に神の恵みだった。大きな力が湧いて来るのを覚えた。その後いつ別れるともなく別れてしまったが、彼は二十四年に帰国、それを縁に今日まで交際が続いている。

病院帰りの体には三交替の積込み作業は辛かった。発熱のため遂にダウンしてしまった。四〇度近くの熱でうなされる夜が続いた。この時だけは看護婦アーニヤーの恩は忘れることはできない。一晚中病床に付きつきりでタオルで冷やしてくれたのを今でも覚えていいる。命令に忠実なのか、女心で一兵士に哀れみを感じたのか、どちらにしてもアーニヤーの看護には心から感謝している。

ある日パン運びの使役に使された。馬の扱いは騎兵仕込みでお手のもの。馬籠の手綱を操って軽く走らせていた。後方で糧秣倉庫係のサーシカがハラショーと言っているのが聞こえた。これが縁でサーシカ伍長の糧秣庫、被服庫の手伝いをする事になった。どんな小さな黒パンのかげらでもポケットに忍ばせて来て同僚に渡す、毎日シューバの古いのを着て作業に出て、被服

庫でまじなシューバと着替えて帰り皆に渡してやったので、羨ましがられこそすれ憎まれはしなかった。

六月の声を聞くとシベリアにも春が訪れる。收容所の半地下式の既に馬を二頭飼っており、この担当は收容所長一家の当番の山口さん（山口県出身）だったが、応援を頼まれて二つ返事で引き受けた。夕方馬を原っぱに引き出して前足を縛って放牧する。朝は引いて来て既に入れる。もうその頃には衛兵所もフリーパスで、ようやく自由が戻ってきた気分になって来た。

一方では朝早くから長いピラとタボールをかついで作業に出掛ける。皆に悪いような気持ちでいっばいだつたが、全くの一人きりの私はあまり注目的にもならず幸いであった。

抑留者の中で格別に恵まれた立場は運が良かったとしか考えられないが、この頃知り合って一緒に寝ていたのが東筑摩郡洗馬出身の北沢さんだった。誠実な人で、夜は二人で故郷の話をしては気を紛らわしていた。二十三年帰郷後すぐに訪ねたが彼はまだ帰っていなかった。気丈な妹さんが家を守っていたが、その後

音信不通となつてしまつた。

昭和二十一年の暮れ頃から、僅かではあるが食事の量質共に良くなつて来たような気がした。

片言ながらロシア語で話も通ずるようになり、年を越して二十二年の六月頃、收容所全員移動することとなつた。前日まで何の話もなかつたのに、秘密を守ることは日本人以上のお家芸だ。まとめる荷物も入のの折りとは違い、雑のう、命の恩人である水筒、布製の背のう、食器、飯盒のみ、極めて持ち物は少ない。約一日位のトラック輸送で到着した收容所は全くの山奥で、おそらくウランウデより相当離れた外蒙古のウランバートル寄りであつたような気がした。たまに会うソ連人には蒙古系の顔を見かけた。作業は相変わらずの松の伐採であつた。

ある日、幸いなことに前の收容所長にばつたり会つた。「中山、今は何をしている」と所長。「松の木のラポータだ」と私。そのまま別れたが、次の日には本部から所長官舎の当番に行くよう連絡が来た。山口さんと所長官舎の当番をしていたことが本当に幸いした。

所長にはスラリとした奥さんと可愛い三歳位の女の子があつた。もう六十歳に近いおばあさんになつていよう。できることなら昔のままですら一家には会いたい。約束を破り一方的に侵入し、あらゆるものを略奪し、六十万人の日本人に労役を課したソ連、いくら憎んでも憎み切れない反面、個人として親しみや恩義を感じるのも人間ゆえかも知れない。

所長は子豚を飼つていた。官舎や時には收容所の残り物で飼つていた。動物好きの私もたまたま手伝つてやつたが、子豚はみるみる大きくなつて二〇キログラムになつた。ある日所長は腰の拳銃で射殺してしまつた。そして馬車を仕立て山から赤松の枝を運んで来て、それに火を付けて豚の毛を焼き出した。赤松の枝と豚の毛の燃えるにおいは異様だつたが、すっかりきれいになつた豚の腸を取り出してそれを私に食べると言つてくれた。肉は脂身も一緒に四角に切つて、驚いたことに奥さんと一緒に馬車で下の部落へ売りに出掛けたことだ。恰幅のよい陸軍大尉が美しい奥さんと豚肉売りに出掛けるとは、一体ソ連という国は、また軍

隊はどうなっているのだろうかと思つた。今でも御機嫌顔の、馬車に乗つた所長の顔を思い出す。

貰つた豚の腸は洗つてバケツで岩塩を入れて煮たが、脂がベトベトして食べられたものではなかつた。同僚の山口さんと栄養補給に大事に食べたが、遂に食べきれなかつた。途中で豚を殺したのは餌がなくなつて飼いきれなかつたのだと蒙古系の憲兵の奥さんが話してくれたが、この奥さんも官舎中の嫌われ者だつた。

仕事も楽で腹もままあだし、衛門も顔パスで通れ、作業隊の皆さんに比べれば殿様のようだったとひそかに山口さんと話し合つた。この山口さんとも全く音信不通、忘れられない一人なのに残念でたまらない。

収容所の中も民主運動が盛んになり、天皇制打倒とか資本家追放のポスターが張られるようになっていた。モスクワの共産党学校で学んだという若い指導者等の指揮で集会所に集まり、演説を聞いたり「赤旗の歌」等の合唱をやらされた。月に四、五回はあつた。

腹の中では馬鹿にしていたが誰にも話すこともできないし、分かつたような顔をして出席していたが、不思議なもので、段々と彼等のアジ演説を肯定するようになってしまった。これが洗脳と言うものか、恐ろしいものだ。彼等曰く、我々が今日このような生活をしているのも軍隊という組織に組み入れられたからだ、農民はいつの時代にも犠牲になって来た、ソ連進入時に軍の上層部は飛行機で本土へ逃げ帰つた、東京では資本家は腹いっぱい米の飯を食べている、大衆は食糧がなくて路頭に迷っている等々の演説を聞いているうちに、段々と物の考え方が左に傾いて行くのが分かつた。これも苦しい生活の中ですべてが反逆的になつていたせいだ。山口さんと「捕虜の中では殿様生活だな」と話しながら昭和二十三年の新年を迎えた。

シベリアの春は遅く、六月頃にならないと草花は美しくならない。食糧事情も幾分良くなり、皆精神的に落ち着いて来た。カンポイの口からも「ヤポンスキー東京ダモイ」の声がちらはら聞こえるようになってた。

ある日看護婦のアーニャーと事務所の事務員のジェーニアと山口さんと四人で裏山へ散歩に出掛けた。収容所や官舎や事務所が一望に見える松林の丘だった。若い男女四人何を話すともなく、足もとを見るところには点々と迎春花が咲いていた。故郷ではこの花は「チヨン花」と呼んでいた。細いうぶ毛の生えた可憐な花と若い娘達とのこの時間は、抑留の身であることを忘れ、浮き浮きとした気分で松林を散策した。

八月上旬、我が作業大隊に突然「東京ダモイ」が伝えられた。収容所内は大騒ぎ、一晩のうちに準備完了、翌日輸送のトラックが幾台も到着した。ここで大変なことが起こった。私と山口さん、通訳、炊事の班長、縫工兵の五人は残留組とされてしまった。何のことも分からずに元気いっぱいトラックに乗る皆を見送った。なぜ俺達は残されてしまったのか。二日後、ウランウデから帰ってきた所長のところへ押し掛けて「なぜ俺達は帰れないのか」、所長曰く「スコラダモイ」。何が何だか分からなかった。所長の言葉

は本当だった。五人はウランウデ行きトラックに乗るまでには幾日もかからなかった。ウランウデの駅でまた驚いた。全く知らない大隊のダモイ列車に乗せられたのであった。

大平原を走っては止まり、また走り、一週間ばかりの日が過ぎただろうか、ダモイ列車はナホトカへ到着した。

ナホトカより故郷へ

人間は気持ちによってこうも変わるものであろうか。足取りが、体の動きが全く違う。沖には日の丸をつけた輸送船が見える。しかしナホトカほど人生の明暗を見せつけられた所はなかった。乗船を前にして遂に名前を呼ばれずに力なく宿舎へ帰る人、または一個中隊揃って山の向こうの収容所へ向かう者、名前を呼ばれてタラップを駆け上がる人。日本人同士の告げ口があったと聞いたが、これは信じたくないことだ。

民主運動にも参加した。持ち物の写真も一切捨てた、疑われるものはない、俺は帰れるぞと思いつながらもドキドキして待っていた私の耳に「麻人中山」の声

が飛び込んで来た。タラップを上り切った所に日本の看護婦さんがいた。「御苦勞さんでした」の声は正に日本人の声だった。

船に弱いので甲板より下って横になっていたが五人組はいつしかばらばらになってしまい、また一人ぼっちだった。次の日、甲板では大変なことが起きていた。それはソ連で幅をきかせていた民主グループの指導者の若者を甲板の上に引きずり出して、二、三の筋金入りの下士官が殴る蹴るの暴行を加えるのだった。立場は一変したのだ。さすがに船長も見かねて中に入ったが、騒ぎは容易に収まらなかった。「海にたたき込むぞ」の大声を後に、私は一人ぼっちこそそと船倉に戻ってしまった。

次の日の朝、船は両側に緑の山を見ながら入江を進んで行った。甲板で見たものは数メートル左手前に茅葺きの二、三軒の民家と松林だった。まさしく日本に帰ったぞ、甲板の上で飛び上がって喜んだ。舞鶴の栈橋を上る足取りは軽かった。時は昭和二十三年八月十六日、船の名は信濃丸だった。

検疫所で頭から真白い粉をかけられたが、DDT粉剤と後で知った。入浴後の畳の上の気分はつくづく日本の味を感じた。

十九日の夕刻、東舞鶴駅を出発、京都へ名古屋へ木曾路を経て、塩尻へ長野着。飯田線の車窓より見た伊那富士（戸倉山）の姿はシベリアの病床で頭に浮かんだ山容と寸分違わなかった。

迎えに来た弟と高遠町で会ったが分からなかった。弟とは八年ぶりだった。六年ぶりに会った両親は思いのほか老いているのを感じた。

今思えば、私は六十万人と言われる抑留者の中では本当に恵まれていたと思う。半年の病院生活、たった半年の労働で、後の二年間は官舎当番や糧秣被服倉庫係、退院以後誰とも関係のない一人ぼっち。ダモイの時も、本隊と離れて別に帰してくれたのも所長の配慮だったかと思っている。

記憶をたどって拙文を書いたが、終わりに六万余と言われるシベリア抑留者の英霊の御冥福を心よりお祈りして、筆をおきます。

【執筆者の紹介】

大正十一年一月一日 長野県上伊那郡美和村溝口で生

まれる

昭和十一年三月 美和尋常高等小学校を卒業

昭和十六年 美和青年学校卒業

昭和十七年九月 徴兵検査 甲種合格

昭和十八年一月十日 金沢市騎兵第五十二連隊に入営

三月 満州牡丹江省樺林第九師団騎兵第九

連隊に転属

昭和十九年十月 満州興安北省海拉爾搜索第二一九連

隊に転属

昭和二十年十月 入ソ

昭和二十三年八月 舞鶴港上陸

八月二十日 復員

昭和二十四年二月 美和村役場に就職

昭和五十一年三月三十一日 長谷村役場退職

昭和五十四年四月、平成三年 三期十二年長谷村議会

議員に就任

平成六年七月 長谷村選挙管理委員に就任

昭和六十年より全抑協長野県支部監事

(長野県 西村 又夫)

シベリア抑留者の生への執着

愛知県 森 藤 眞一郎

将校が重戦車でひき殺された

昭和二十(一九四五)年八月十五日、関東軍第八六八部隊は、軍の再編を目的に綏陽(現ソイヤン)から敵の目をくらますため溪谷を抜け牡丹江へと向かっていった。我々国境守備隊(約千人)は、混成部隊であるため中隊ごと各々経路を選択し行動した。

我々野戦重砲隊は馬数十頭と砲二門である。その行動途中、牡丹江街道でソ連戦車隊十数台の攻撃を受け、やむを得ず応戦し戦車三台を擱座炎上撤退させた。しかし今後の展開を考え、照準器だけ取り外し、砲は炎上爆破させ、兵、馬は溪谷に沿って山中へと転戦した。途中無惨にも邦人、兵隊が体力の限界に力尽